

聖書:列王記第二 8章7～15節

説教:ご主人様はなぜ泣くのですか

はじめに

旧約聖書に登場する預言者は神のことばを語りながら、身分の高い者であろうが容赦なく罪を指摘します。ですから、たいいてい人気がありません。特に政府の要人から目の敵にされることがほとんどで、それによって多くの預言者が殺されました。その点で言えば、エリシャはかなり珍しいほうでしょう。彼は北イスラエルの王と交流があったばかりでなく、隣にあったアラムという国の王ベン・ハダドとも交流を持ちます。時にはいのちを狙われるようなことはあったにしても、一定の信頼関係があったようなのです。

今日の箇所は、エリシャがアラムの首都であったダマスコに行ったときのことで、その頃重い病気にかかっていたベン・ハダドは、部下であったハザエルをエリシャのもとに遣わし、自分が助かるかどうかを確かめさせようとしています。そこで何が起きたのかは、あらためて説明する必要もないくらいです。しかし分からないことがあります。どうしてエリシャはハザエルに「あなたがアラムの王となる」と語ったのか。というのは、もしエリシャがこんなことを言わなかったら、ハザエルはベン・ハダドを殺すことはなかったし、イスラエルは苦しまないで済んだはず。そこがすっきりしません。エリシャがこのようにことを語ったのは、何か理由があるはずで、もしかして、そこに救いに関する重要な意味が込められている可能性があります。

1 エリヤ

1) 「私のいのちを取ろうと狙っています」

「あなたがアラムの王となる」とエリシャが告げた理由。そのことを知るために、エリシャの先生であったエリヤが異教の神々であるバアルの預言者たちとたった一人で戦ったあたりにまでさかのぼることになります。この戦いはエリシャの圧倒的勝利で終わるのですが、あまりの緊張から彼はバーンアウトして鬱状態になってしまいます。それで神はまず食糧と水を与えてしばらく休ませてから、神の山と呼ばれるホレブの山に向かうよう指示します。その山にエリヤが四十日四十夜かけてたどりつくと、主はこう尋ねる。「エリヤよ、ここで何をしているのか。」エリヤは答えます。「私は万軍の神、主に熱心に仕えました。しかし、イス

ラエルの子らはあなたとの契約を捨て、あなたの祭壇を壊し、あなたの預言者たちを剣で殺しました。ただ私だけが残りましたが、彼らは私のいのちを取ろうとしています。」(一列19章10, 14節)

2) ハザエルに油を注げ(列王記第一 19章15節)

まったく同じやりとりが二回繰り返された後で、主はこのように告げました。「さあ、ダマスコの荒野へ帰って行け。そこに行き、ハザエルに油を注いで、アラムの王とせよ。」(同15節)

これが告げられたのは、エリシャが預言者としての召命を受ける前のことですので、後になってエリシャがエリヤの弟子になったとき先生から聞かされていたのでしょうか。エリヤは自分の手でハザエルに油を注ぐことはありませんでしたから、エリシャがその使命を託されていたと自覚しており、その時が来るのを待っていた。それで「あなたがアラムの王となる」と告げた。エリシャがこんなことを言わなければと思ったかもしれませんが、そうではなくて、あくまでも神の命令でした。もちろんエリシャは、自分が語ったことがどんな事態を引き起こすのかを知っています。それで彼は泣き出す。

3) イスラエルを苦しめる者を指名する

それを見ていたハザエルは困惑しながらこう尋ねます。「ご主人様はなぜ泣くのですか。」エリシャはこう答えるのです。「私は、あなたがイスラエル人に害を加えようとしていることを知っているからだ。あなたあイスラエル人の要塞に火を放ち、その若い男たちを剣で切り殺し、幼子たちを八つ裂きにし、妊婦たちを切り裂くだろう。」

なんとも耳を塞ぎたくなるような残酷な内容です。神はこのようなことをするとわかっている男を、どうしてアラムの王に指名するのでしょうか。そのことはまた後で考えることにします。

2 ハザエル

1) 「しもべは犬にすぎないのに」

その前に、ハザエルがどう応答したかを見ておきましょう。彼はこう答えています。13節。「しもべは犬にすぎないのに、どうして、そんな大それたことができるでしょう。」子どもを八つ裂きに

するような恐ろしいこと、そんなことが私にできるはずはない。おそらく嘘ではなかったでしょう。そのとき彼は本心から言ったつもりだったと思うのです。

2) 心の内にあるもの

でもどうでしょうか。「私は悪人です」と言う人はまずいません。「私は正直で優しい人間です。弱い者いじめなんか絶対にしません。」だれもが本心のつもりでそう言います。でも、もし本当にそのとおりであったなら、世界がこんなに悪くなるはずはない。もっとよくなっていたはずではないですか。ところが現実をご覧のとおりです。どうしてこたえてしまったのか。難しいことではありません。皆さんも胸に手を当てて考えればわかることです。「口で言っていることと、実際に心の中にあるものが違う。」これを聖書では罪と言っているわけですが、それでこの世界に悪が満ちてしまいました。

ハザエルはその罪の代表選手と言っていいでしょう。最初、エリシャから「あなたがアラムの王となる」と言われたとき、エリシャの前では強く否定したはずです。「まさか。私はそのような者ではない。」口でそう言っただろうと思うのです。ではそれだけかと言えばそうではない。「どきり」としました。心の奥底に潜んでいた思いを言い当てられた感じがしたのです。エリシャがそう言うのなら、もしかして自分は本当に王になれるのではないか。そういう考えがむくむき起こる。そこから権力をつかむためにアクセルを一気に踏み込みます。ハザエルは王のところへ戻ると、エリシャから自分がアラムの王と言われたことは一切隠し、次の日、王を密かに殺して権力を握ります。

3 イエス

1) 涙を流す神

聖書によれば、神がこの世界を御支配しておられると書いています。ところが世界の人々は、戦争や事故や災害、病気、飢え、暴力によって苦しんでいます。そうすると誰も疑問に思いません。神は本当にいるのか。仮に神がいたとしても、神は私たち人間に何の関心もない、冷たい神ではないのか。神は人間が苦しむようにわざと仕組んでいるのか。今日のところはそんなふうにも読めてしまいます。

本当にそうなののでしょうか。11, 12節こうあります。「神の人は、彼が恥じるほどじっと彼を見つめ、そして泣き出したので、ハザエルは尋ねた。

『ご主人様はなぜ泣くのですか。』エリシャは答えた。『私は、あなたがイスラエル人に害を加えようとしていることを知っているからだ。』(後略)』

エリシャは個人的な感情で泣いているのではありません。彼は神の心を代表し、神の代理人として泣いています。もし神が本当に冷酷で無慈悲な方であるなら、エリシャは泣きはしなかったでしょう。

2) ユダの手によって苦しむ者となられる

それならなおさら、イスラエルが苦しむことがないように、神は動くべきではないか。だれもが考えます。ところが神のご計画は私たちの思いとは異なる。いったいどんなふうになるのか。そのことを知るために、私たちはイエス・キリストに目を向けることとなります。

皆さんもよくご存じの最後の晩餐の場面を思い出してください。あのときイエスはこう言われました。ヨハネの福音書13章21節後半。「まことに、まことに、あなたがたに言います。あなたがたのうちの一人が、わたしを裏切ります。」これを聞いた弟子たちが戸惑っていると今度はイエスがこう続ける。同26節。「『わたしがパン切れを浸して与える者が、その人です。』それからイエスはパン切れを浸して取り、イスカリオテのシモンの子ユダに与えられた。」ユダがパンを受け取ると、そのとき、サタンが彼に入った。するとイエスは彼に言われた。『あなたがしようとしていることを、すぐにしなさい。』」

この後ユダが何をしたのは皆さんもよくご存じです。もしあのとき、イエスが浸したパンをユダに渡さなかったならイエスは十字架につかずに済んだのではないか。「あなたがしようとしていること、すぐにしなさい」などと言わなければ、イエスが苦しむことなどなかったはずだ。ところがイエスは、人間の思いとはまったく正反対に、わざわざ自分が十字架にかかるように仕向けていくのです。

ユダに対してイエスがなされたことと、今日の箇所を比べてみてください。ハザエルの立場はどこかユダに似ていませんか。ハザエルはベン・ハダドを裏切り、イスラエルに対して目をおおうような残酷な方法で苦しめていきます。それと同じようにユダもイエスを裏切り、イエスを十字架で苦しめていく。そんなふうにならなくなって見えてきます。なぜかイエスはこんなふうにして十字架に向かって急いでいきます。

こういうことではないでしょうか。神は戦争を止めようとしな。神は人間が苦しんでも何とも思わない冷酷で無慈悲なのだ。もしそう思っているのなら、正反対です。神は人間が苦しむのをご覧になって涙を流すほどに悲しみます。それも椅子に座りながらただ悲しむというのでもありません。苦しみをともにしようされます。ご自分も私たちとおなじ姿になられ、裏切られて十字架につるされていく。人の目には完全な敗北としか見えない道を歩まれます。

私たちはこの方の御跡をたどってまいります。

3) 苦しみの先にある希望

もしイエスのみわががそこで終わっていたなら、どこにも救いもありません。しかしこの方が墓の穴から三日目によみがえられたことで初めてわかります。私たちが味わっているあらゆる悩みと不安。からだの弱さ。人に裏切られたことも、家族同士でありながら関係が壊れてしまっても、そして私たちの前に恐ろしい死が立ちはだかったとしても、そこで絶望する必要がない。必ずその先に希望がある。あなたがもし苦しみを抱えているのなら、あなたは十字架に近いところにいる。あなたがもし希望をうしなって絶望して泣き叫んでいるのなら、あなたは十字架にいる。十字架にこそ本当の希望がある。主はそのように呼びかけるのです。

4) かすかな細い声で

最後に確認します。エリヤ、エリシャは神が苦しみを通して私たちに救われるということをどのようにして知ったのでしょうか。

最初に取り上げたエリヤの場面に戻ります。ホレブの山でエリヤが神と出会った場面については、このように書かれています。「地震の後に火があつたが、火の中にも主はおられなかった。しかし火の後に、かすかな細い声があつた。」

なぜ主はかすかな細い声で語るのでしょうか。エリヤはそれまで主の声を何度か聞いています。それはいつも力強い、神の声でした。ですから地震があつたときも火があつたときも、もしかしてそこに神がおられるのではないかと考えた。ところがどこにもおられない。それどころかまったく意外にも神はかすかな細い声で語りかける。なぜでしょう。主が十字架におかかりになっているからではありませんか。そこで初めてエリヤは救い主が苦しまれることを教えられる。そうしてからハザエルに油を注げと言われる。そのような順番です。イスラエルが苦しむこと。それはこの方が苦しみを通して救いに至る道を示すためだったのです。